県民暮らしのアンケート調査

（2024 年 9 月実施）

香川県民の暮らし向きや消費の実態・意識を把握するために、「県民暮らしのアンケート調査」を実施し、その結果をとりまとめたので、報告する。

調査結果概要

１．景況感と物価

- 県内の景況感は、1年前と比べて「良くなった」よりも「悪くなった」と感じる県民が多い。
- 現在の物価を1年前と比べた実感は、8 割超の県民が「上がった」と感じている。

２．暮らし向き

- 1年前と比べた現在の暮らし向きは、「ゆとりが出てきた」との回答が 9.4%に対して、「ゆとりがなくなってきた」が 40.5%と、県民は暮らし向きが悪くなってきたと感じている。

３．収入

- 現在の収入が、1年前と比べて「減った」との回答が 23.4%に対し、「増えた」は 17.3%にとどまり、収入増の県民はまだ少ない状況にある。ただし、40 代以上の中高年層に比べ、30 代以下の若年層は「増えた」割合が多くなっている。

４．夏季ボーナス

- 1年前と比べた夏季ボーナスは、「増えた」との回答が 15.0%に対して、「減った」は 11.5%となった。2020 年以来、初めて「増えた」が「減った」を上回った。特に「増えた」は、20 代が最も多く、年代が上がるにつれて少なくなる傾向がみられた。また、ボーナスの使い道で、「預貯金」や「投資」が増加する一方、「生活補填」や「旅行等」などが減少しており、県民がボーナス支出を抑えている状況が窺える。

５．消費支出の年間増減

- 増加した消費支出は【複数回答】、「食料品（食材等）」75.8%、「食料品（惣菜等）」41.9%、「住居費（水道光熱費等含む）」22.6%、「交通費等（ガソリン等含む）」20.9%など。
- 減少した支出項目は【同上】、「旅行・レジャー等」17.5%、「衣料品等」16.8%、「外食費」15.8%など。

アンケート調査概要

1. 調査期間：2024年8月29日～9月3日
2. 調査対象：香川県内在住の20～69歳の男女
3. 調査方法：インターネット調査（調査会社のモニターによる回答）
4. 有効回答数：513人（世帯として回答）
5. 回答者の構成と属性：次の図表のとおり

■年代・性別	計	構成比	男	構成比	女	構成比
20代(20-29歳)	79	15.4	35	6.8	44	8.6
30代(30-39歳)	108	21.1	58	11.3	50	9.7
40代(40-49歳)	108	21.1	52	10.1	56	10.9
50代(50-59歳)	109	21.2	50	9.7	59	11.5
60代(60-69歳)	109	21.2	58	11.3	51	9.9
合計	513	100.0	255	49.3	258	50.7

■世帯の年収別	人数	構成比
300万円未満	99	27.8
300～500万円未満	113	31.7
500～700万円未満	70	19.7
700～1000万円未満	47	13.2
1000万円以上	27	7.6
合計	356	100.0

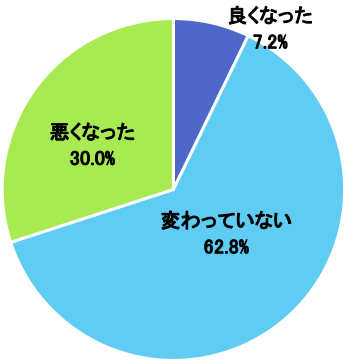
注）四捨五入の関係で内訳と合計が必ずしも一致しない場合がある。以降、本文中の図表も同様

なお、本文中では「20-29歳」：20代、「30-39歳」：30代、「40-49歳」を40代、「50-59歳」を50代、「60-69歳」を60代として表記している。

1. 景況感と物価

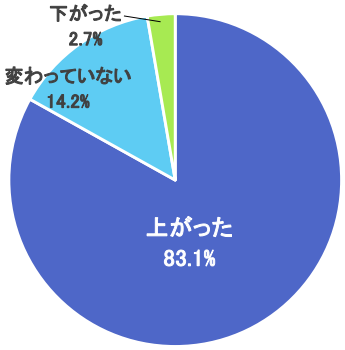
県民に、1年前と比べた現在の景気の実感を尋ねたところ、「悪くなった」の回答が 30.0%、「良くなった」は 7.2%となった(図表 1-1)。景気は「良くなった」よりも「悪くなった」と感じる県民が多いことを示している。

図表 1-1　1年前と比べた現在の景況感



現在の物価を1年前と比較した実感を尋ねると、「上がった」が 83.1%と、県民の8割超が物価は上昇したと感じている(図表 1-2)。

図表 1-2　1 年前と比べた物価実感

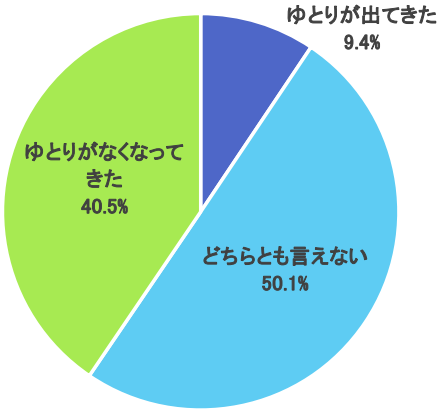


2. 暮らし向き

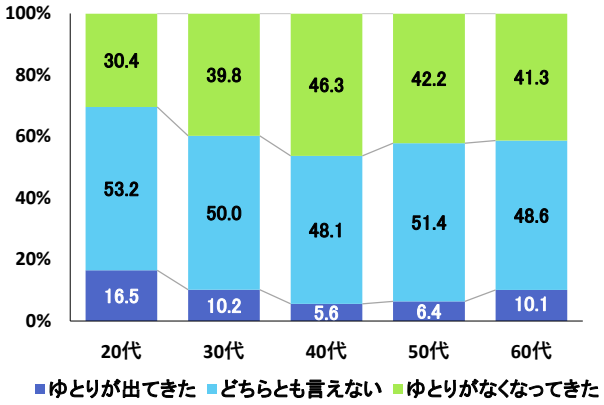
1年前と比べた現在の暮らし向きについて(図表 2-1)、「ゆとりがなくなってきた」が 40.5%と多いのに対し、「ゆとりが出てきた」は 9.4%にとどまり、県民は暮らし向きが悪くなってきたと感じている。

年代別でみると(図表 2-2)、「ゆとりがなくなってきた」は 40 代が 46.3%と最も多く、次いで 50 代 42.2%、60 代 41.3%と続く。「ゆとりが出てきた」は 20 代が 16.5%、30 代 10.2%と多いが、50 代 6.4%、40 代 5.6%と少ない。これから、40 代、50 代の中高年層は暮らし向きが悪くなってきたと感じている。

図表 2-1　1 年前と比べた暮らし向き



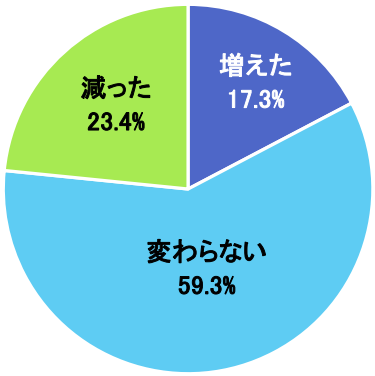
図表 2-2　年代別の暮らし向き



3. 収入

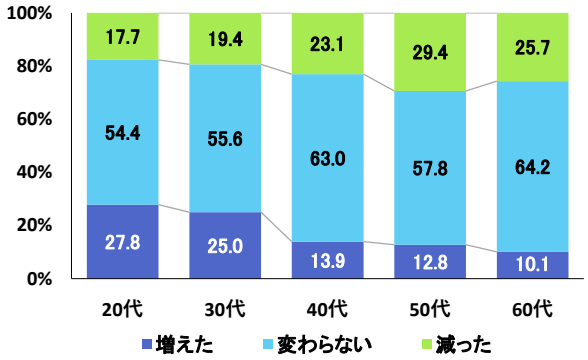
現在の収入を1年前と比べた変化を尋ねたところ(図表 3-1)、「変わらない」との回答が 59.3%と最も多いが、「減った」が 23.4%に対し、「増えた」は 17.3%にとどまり、収入増の県民はまだ少ない状況にある。

図表 3-1　1年前と比べた収入



収入変化を年代別にみると(図表 3-2)、「増えた」は 20 代が 27.8%、30 代 25.0%と多いが、40 代 13.9%、50 代 12.8%、60 代 10.1%と少ない。これは、今年 5%超の賃上げ(「連合」発表)から、企業が人材の確保・採用に向けてインセンティブとして若年層への賃上げ(収入増)を実施していることの現れと考えられる。

図表 3-2 年代別の収入変化

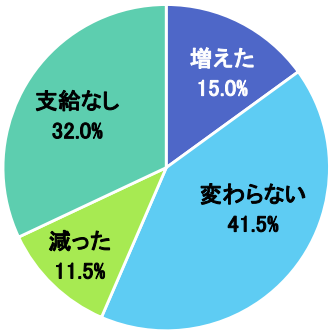


収入が「減った」は、50 代が 29.4%で最も多く、次いで 60 代 25.7%、40 代 23.1%と中高年層は多く、30 代 19.4%、20 代は 17.7%と、若年層は少ない。賃上げは若年層を中心に手厚く、中高年層に厳しかったことをうかがわせる。

4. 夏季ボーナス

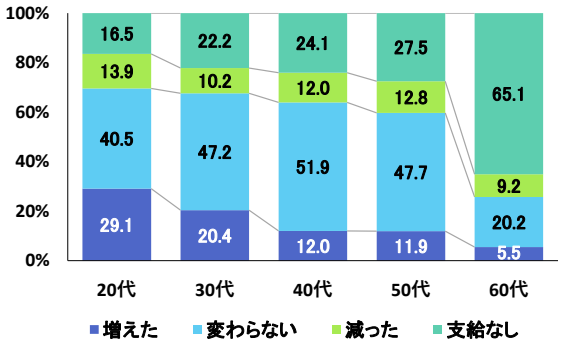
夏季ボーナスについて(図表 4-1)、1年前と比較して「変わらない」の回答が 41.5%で最も多かった。次いで「支給なし」32.0%、「増えた」15.0%、「減った」11.5%となっており、今年は特に「増えた」が「減った」を上回った。

図表 4-1 1年前と比べた夏季ボーナス



年代別にみると(図表 4-2)、「増えた」は、20 代が 29.1%で最も多く、30 代も 20.4%と続くが、40 代では 12.0%、50 代 11.9%、60 代 5.5%と少なくなる。「増えた」は若い年代ほど多くなっており、ボーナスの配分も若年層に厚くなっているようだ。

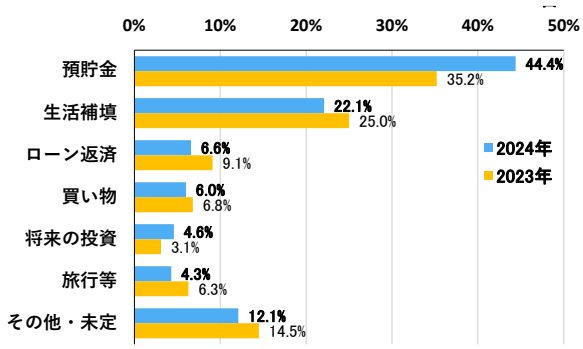
図表 4-2 年代別の夏季ボーナス変化



夏季ボーナスの使い道は、「預貯金」が 44.4%で最も多く、次いで「生活補填」が 22.1%、「ローン返済」6.6%、「買い物」6.0%、「将来の投資」4.6%などとなっている(図表 4-3)。

前年 2023 年と比較すると、今年は「預貯金」が 9.2%増、「将来の投資(注:株式を含む長期的投資、老後に向けた投資など)」1.5%増となる一方、「生活補填」▲2.9%減、「ローン返済」▲2.5%減、「旅行等」▲2.0%減などとなっており、県民がボーナス支出を抑えている状況が窺える。

図表 4-3 夏ボーナスの使い道(前年比較)



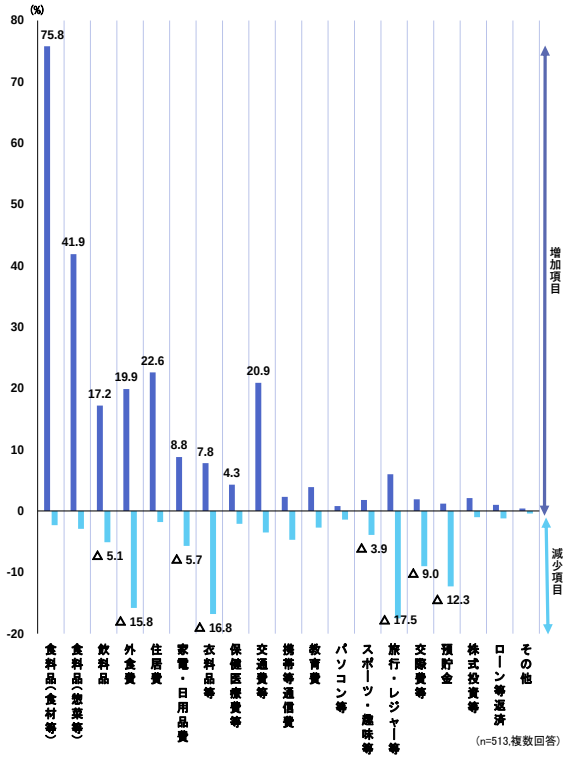
5. 消費支出の年間増減

過去 1 年間の消費支出において(複数回答)、増加した項目では、「食料品(補足:自宅で料理する食材等の費用)」が 75.8%と最も多く、県内の世帯の 4 分の 3 が出費増を実感している(図表 6-1)。次いで「食料品(補足:総菜や冷凍食品、レトルト

食品等の費用）」が 41.9%と多く、「住居費（補足：家賃、修繕、水道光熱費）」22.6%、「交通費等（補足：車費用やガソリンなど）」20.9%などと続く。これら上位の支出増加は、最近の食材、調味料など、そしてガソリンや電気代の値上り、人件費増の価格転嫁等を反映したものとなっている。

減少した項目では、「旅行・レジャー等」▲17.5%、「衣料品等」▲16.8%、「外食費」▲15.8%、「預貯金」▲12.3%などとなっている。食料品や光熱費、ガソリン代等の支出増への対応として、旅行や衣料、外食などを抑えざるを得ない状況がうかがわれる。

図表 5-1　消費支出の増減



まとめ

今回調査では、県民の 8 割超は物価が「上がった」と実感し、そして県民の 4 割は暮らし向きに「ゆとりがなくなってきた」と回答している。ただ、収入面では、20 代、30 代の若年層で「増えた」割合が増加し、夏季ボーナスの「増えた」割合が 2024 年に初めて「減った」を上回った。

今年に入って物価も落ち着きはじめ、またボーナスを含む収入面での増加もみられており、今後の暮らし向きの改善に期待したい。

以上